

<シンポジウム 4>パーキンソン病の分子病態機序のブレークスルー

ねらい

座長 京都大学医学部神経内科 高橋 良輔
京都府立医科大学神経内科 中川 正法

(臨床神経 2010;50:862)

家族性パーキンソン病については、分子遺伝学的研究の発展により、その病因遺伝子が解明され、最近では PARK2/PINK1 のかかわる病態機序が解明され、分子病態機序の研究は新しいステージに入りつつある。一方で、孤発性パーキンソン病については、その病因の解明は困難であったが、最近になりゲノム解析技術の飛躍的な進歩により研究が発展し、その

疾患感受性遺伝子の解明は、頻度の高い多型に着目したゲノムワイド関連解析、頻度は低いが発症への Effect size の大きい変異解析という2つのアプローチがとられている。本シンポジウムでは、双方の研究における最新の結果を紹介するとともにパーキンソン病の分子病態機序研究のブレークスルーに焦点を当てたい。